第22回夏期福音特別集会（１）（鹿沢）
パウロのバプテスマ
――使徒行伝第９章１～22節――

１９７５年８月22日
小池辰雄

コンダクター　パウロの血筋　火のような性格　突破口が十字架　劇的有機体的神学　愛の神学　先駆者ステパノ　パウロへの霊撃　聖書は大ドラマ　神に於ける熱心　見事な転回あなたこそは　イザヤ書53章の贖い　それが本ものであるか　パウロのバプテスマ　祈り

【使徒７】

51 **項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。……**

54 **人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向かう。**

55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、**56 **『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』**57 **ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、**58 **ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。**59 **かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』**60 **また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就けり。**

【使徒９】

1 **サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充し、大祭司**
にいたりて、2 **ダマスコにある諸教会への添書を請う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かん為なり。**3 **往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らしたれば、**4 **かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。**5 **彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。**6 **起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』**7 **同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。**8 **サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、**9 **三日のあいだ見えず、また飲食せざりき。**

10 **さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主いい給**

う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直(すぐ)という街(ちまた)にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按(お)くを見たり』13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就(つ)きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処(ここ)にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難(くるしみ)を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途(みち)にて現れ給いしイエス、われを遣(つかわ)し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗(うろこ)のごときものの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、20直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣(の)べたり。21聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害(そこな)いし人ならずや、又ここに来(きた)りしも之を縛りて祭司長らの許(もと)に曳きゆかんが為ならずや』22サウロますます能力(ちから)くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

●コンダクター

私は、音楽でいうと、コンダクターです。自分は棒を振っているだけで、何もしゃべらない。あなた方にみんな音を出してもらう。本当は、そういう集会でありたい。私は沈黙して叫びますから、あなた方は声を出して、魂の大交響楽になっていただきたい。私の沈黙の叫びというのは、非常に多様性をもっています。ですから、その沈黙の叫びの多様性を直観して、一人一人が音を発していく。そして、大交響楽になる。誰に対して音を発するかというと、キリストに向かってです。そういう集会でありたい。けれども、現実には、どうも、そうはいかないものだから、私がしゃべりますけれども。あなた方は黙っているけれども、本当はその反対だと、こういう気持で聞いていただきたい。私は仮りにしゃべるから、音の奥を聞いていただきたいわけです。音の奥の音ならざる音を。

ところで、パウロさんは大変な人です。とても、３回や４回でしゃべれるはずのものではない。パウロに対して冒瀆になってしまう。まことにパウロの片鱗に触れるだけです。片鱗に触れるけれども、片鱗でも、触れ方がある。全体にいい加減な触れ方をするよりも、

片鱗に触れて全体を掴むということもあるわけです。

道元禅師が、

「一塵の塵の中に三千の経が入っている」

と言った。日本の第一級の坊さんは素晴らしい。使徒たちに決して負けない次元にいってます。我々日本人が過去の偉大な精神的遺産というものを本当に福音で活かさなければ申し訳ない。

どうぞ、このキリストの福音の角度から、

「私はこれをひとつとっ捕まえて、一生研究しよう」

とか何とか、皆一人一人が志を出してください。その事にかけては掛け替えのない人になる。それを発表しようがしまいが、そんなことはどうでもいい。それだけの気合でもって、お一人お一人が天下一品になる。例えば、「春高楼の花の宴」という、あの一曲を残しただけでも、滝廉太郎という人は永遠の存在である。そういうわけですから、どなたでも、何か本当に永遠的なものを残し得る。それは不立文字で差し支えない。生涯そのものが、一日の生き方そのものが、でも構わない。とにかく、神の国にはっきりとその役割を果たす果たし方をしていきたい。本当の伝道というのは、そういう生き方をした人が、その存在をもって伝道する。いいですか、東洋的な良さというものはそういうところにある。

正直、キリストをおいてはパウロに匹敵する者はいない。

「私はひとつ生涯かけてパウロを研究しよう」

という青年がこの中から起きたっていい。「研究」といったって、いわゆる研究ではない。

「私はヤコブでいく」

「私はヨハネでいく」

と、何だっていい。

●パウロの血筋

今日は、パウロのバプテスマのところまでの彼の生涯が中心になります。

小アジヤのキリキヤ地方のタルソでパウロは生まれました。このタルソという町は、ヘレニズム文化の中心地で、その頃特にストア哲学がかなり勢力をもっていた。当時、哲学並びに文化的な教養の中心はギリシヤのアテネとエジプトのアレキサンドリアと、そしてこのキリキヤのタルソでした。これが文化的な中心地で、しかも、タルソはある意味で、そのうちで一番高かったとも言われるくらいな素晴らしい文化都市であった。それから、特に地理的からいいましても、東方の「ミスティズム」、密教、東方の神秘的な宗教もここに入っていて、そういった雰囲気もパウロは知っていた。

彼の血筋からいうと、これはピリピ書3章やガラテヤ書にも書いてある。イスラエルの血筋、特に、ヘブライ人中のヘブライ人という、名門のベニヤミンの族でありまして、八

日めに割礼を受けている。ですから、選民の一番のエリートコース。しかも、パリサイ派の中に育っている。

パリサイというのはモーセの律法ならびに戒めを非常に重んずる。その律法の数は、命令と禁令を合わせて613ある。律法の解説書に「ミシュナー」というのがありますが、そのミシュナーなんかも彼は充分心得ているように学んだわけです。特に、そちらの方で教育をしたのは、ガマリエルという教法師で、これは使徒行伝5章に書いてあるとおりです。しかも、彼はその塾生のうちの正に一番弟子、抜群の成績なんです。そのことは彼自身が言っている。

そういう、血筋は全くヘブライ人で、ユダヤ教の一番正統派に属して、実存的な訓練を受けている。それから、知識の上でいうと、ギリシヤ的な知識もそこに入っている。ヘブライ語とギリシヤ語が両方とも堪能である。そういう人物です。しかも、市民権からいうと、生まれながらにしてローマ市民権を持っている。だから、ヘブライ、ギリシヤ、ローマというような事態を彼は一身に兼ね持っているわけです。

「5**我は八日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統（ちすじ）、ベニヤミンの族、ヘブル人より出（い）でたるヘブル人なり。**

即ち、ヘレニストではないということ。

律法につきてはパリサイ人、

即ち、律法をよく知りかつそれを実践して自らをよしとしているのがパリサイ人です。パリサイというのは「別たれたるもの」という意味です。他のものとは区別されたるもの。正にエリートということです。

6**熱心につきては教会を迫害したるもの、**

即ち、キリストの群を「あの新興宗教はけしからん」というので、これを迫害した。

律法によれる義につきては責むべき所なかりし者なり。」（ピリピ3・5～6）

即ち、モーセの律法、戒め、それをとにかく、拳々服膺した。その正さにおいては責むべきところがない、正に、品行方正、学術優等なんだ。

パウロは律法というものを非常に重んじました。これは、個人としてもあるいは民族としても、モーセに賜った神の律法は、神の民として絶対に守る義務がある。かつまた、神の国を、メシヤを待望する者は是非とも律法を守っていなければ、メシヤ待望ということは空しいことである。そういう意味で、メシヤを待望することにおいても、律法を守ることは希望をもっているわけです。

「やがて世界に君臨するところの霊的な王者が現れてくる」

と。そういうことは、預言者の預言を正にその角度から受けとっている。これがパウロが出た頃のユダヤ教の精神であるわけです。ですから、後期ユダヤ教というものは非常に律法主義であり、また、そういった意味における終末観をもっていた。

●火のような性格

パウロ自身は、性格からいいますと、ドイツ語でいうと正に「フォイリゲル・ナトゥーア」「火のような性格」であった。大体、一流の人物は火のような性格が多い。ベートーヴェンがそうだった。ベートーヴェンの伝記を読むと、正にその言葉が書いてあった。

「彼は火のような性格の人であった」

と。ピカソなんていう、あの怪物みたいな画家もそうだ。こちらでは、日蓮さん。一流は全部そうだとは言いませんよ。或る人は風の如しとも言うし、或る人は水の如しとも言えるでしょうし、いろいろあります。けれども、パウロ、日蓮、内村鑑三なんかはそうです。だから、内村先生はやっぱり日蓮のことを書いている。

ですから、自分が

「こうだ！」

と思ったら、もの凄くそれに立ち向かっていく。

「律法を守ることが神に対する一番義(ただ)しい在り方である」

と。神に対する熱心は、律法に対する熱心はパウロの右に出でる者はない。それがもの凄く真剣であるだけ、これに反対する者に対しては、またもの凄く真剣に反対する。だから、キリストの弟子たちを迫害してやまない。けれども、パウロは真面目な真剣さです。

「律法の義につきては責むべきところなし」

なんて言えるんだから。

よく、「狂信者」のことを「ファナティケル」というでしょ。だから、ある意味において、パウロはファナティケル、熱狂者なんだ。そうであるけれども、彼の熱心さというものは、どういう熱心かというと、完全なるものを求めての熱心なんです。完全なるものを求めての熱心ですから、いい加減なことでは気が済まない。ユダヤ教では、十字架につけられるのは極刑で、極悪人なんだから。十字架の刑につく者は呪われたるものなんだ。

「木に架けられた者は呪われる」

という。パウロはキリストに直々(じか)に遭っていませんから、この地上では。直々にキリストに遭っていたら、もう少しパウロも考え直したか何か知らんけれども。パウロにしてみれば、

「呪われたる者を信ずるなんていうのはとんでもない話だ。それをメシヤ、救主(すくいぬし)だなんていうのはとんでもない。メシヤならちゃんと王政を敷いて、地上に神さまの御意を行うはずだ。ところが、十字架に懸かった。それをメシヤだと思っているのは、あいつらは一体正気の沙汰か」

というわけだ。ですから、これを迫害することは、彼にとっては正に律法に対する熱心と同じような具合に熱心なんだ。とにかく、いい加減なことができない。すべて百％にやっておこうと。だから、殺人犯ですよ。

「牢屋に入れて、殺すことをよしとしていた」

のだから。パウロは殺人罪なんだ。本当はちょっと簡単に生きていられないわけだ。

宗教の世界で、それを思い込んで、それに対する熱心というのは困る。日蓮が多少その角度を持っていた。だから、もの凄い勢いで他宗を排撃した。パウロと日蓮はそういうところがちょっと似ている。いくら熱心だって、ユダヤ教時代のパウロは本当の世界が分かっていない。本当の世界が分かっていれば、そういうことはできないわけです。

●突破口が十字架

パウロはキリストの弟子に立ち向かっていましたが、今度は、少し逆上りまして、キリストの直弟子たち、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを見ます。

「**I……我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち生命（いのち）の言（ことば）につきて**」（ヨハネ一１・１）

と、ヨハネ書簡に書いてあるけれども、彼らは直々（じか）にキリストと一緒に飯を食べていた。いくらキリストが桁違いであっても、やっぱりこれに直結できなかった。

「はいっ」

と言って彼らは従って行った。この従い方は素晴らしい。

「**直ちに従えり**」

と書いてある。素晴らしいのだけれども、どうもいかん。時々躓いてしまう。躓いたり転んだり。一番ひどいのはペテロです。彼らはキリストの弟子たちなんだけれども、このキリストの弟子たちがどうにもならん。最後にはキリストが十字架に懸かると、みんな散り散りに逃げてしまった。キリストの言ったことをちょっとも受けとっていない。

「**私は三日めに甦える**」

と言っているのに、キリストが復活しても、それを信じない。むしろ、女のひとが素直に受けとった。初めはびっくりしたけれども。復活したことを聞いただけではダメだった。今度は見たんだ、本当にキリストの復活を。甦りのキリストに直々にでっくわした。

「**見ずして信ずる者はさいわいなり**」

なんだけれども、見ずして信じられなかった。それで初めて、彼らは

「私たちは間違っていた」

と言って立ち上がった。立ち上がったけれども、まだダメなんだ、それくらいのことでは。復活のキリストにでっくわしたけれども、彼らがそれで力が来たようだったけれども、まだ本当には力はこなかった。キリストが、

「**お前たち、祈って待っていろ**」

と仰った。そして、皆一緒になって祈って十日間待っていたら、聖霊が臨んできた。別れる前にキリストは彼らに言われた、

「**私が天界に行くのはお前たちの為なんだ。今に、お前たちは、私が言ったり**

為たりした事が本当に分かる時がくる。約束の御霊を、助主を送るぞ」

と。あのヨハネ伝の15章から17章あたりまでに出ているところの、キリストの最後の別れの言葉はまた、福音書のある意味におけるクライマックスみたいな所だ。キリストは先の先まで見えている。素晴らしいひとだね。

見てもまだダメ。聞いてもまだダメ。あるいは、手で触れてもまだダメ。では、どうしたらいいか。中に入らなければダメだ。中に入るまではダメなんだ。キリストが弟子たちの中に入るまでは、どうにもならん。

では、どうして、キリストは弟子たちの中に入ったか。もうちゃんと、弟子たちの中に入る一つの突破口はできている。突破口が十字架なんです。突破口とは、彼らを全部贖い取っている。

「お前たちの如何にかかわらない。私はお前たちを完全に贖いとってしまっている。贖罪している。現実にどうであっても、そんなことはいいんだ。過去も現在も未来も問題でない。本当の永遠をお前たちの中に置くために、この十字架がある」

と。それでなければ、キリストは十字架に懸からなかった。いきなり、天界に行ってしまったんです。そして、「私の真似をしてごらん」というわけだ。みんな、落第する。キリストはいきなり天界に本当は行きたかった。

「この杯を、できたら、はずしてください。けれども、私の願いではない。あなたの御意がどうぞ成ってください。あなたの本願が成ってください」

と。もちろん、キリストがあの祈りをするためには、12才のキリストから32、33才のキリストの、空白と思われるところの中で旧約をしっかり掴み、祈り込んで、本当の神の御意はもう受けとっているわけです。そして、最後の所でそれを言って、祈られた。

「お前が贖罪をしなかったら、お前が十字架に懸からなかったら、お前が羔とならなかったら、旧約の宗教は結局そのままで、救いは人に来ない」

と。

●劇的有機体的神学

人間というものはしょうがない者ですよ。今の様子を見ていると、21世紀は果たして本当に来るかと思われるくらいです。聖書が言う通りです。最後に天国は地上には来ない。大きなカタストローフェで、ひっくり返ってしまう。黙示録にある通りです。ただ、そこで本当に神の国の民となる為には、我々がこの地上で、世の中がどうなろうが、世界がどうなろうが、神の国の民は神の国の民らしく、神の道を、キリストの道を本当に生きたか生きなかったか、これだけが決定する。そういう生き方を本当にしなかったら。

私たちはそれができる、この福音を受けとったら。観念信仰ではダメです。これは、使徒たちが立ち上がったものと同じものをもらわなければ。これが聖霊です。

みんな

「原始キリスト教」

だの何のかんのと言って、書かれた答案は同じことを言いますよ。書かれた答案はどんなに百点満点だってダメなんだ、そこはパウロの熱心さと同じように。パウロは、

「律法はどういうものか？」

といって律法を認識しなかった。彼は律法を実行した。実存の世界なんだ。

ヤーヴェーの神さまは実存の神である。

「我は有りて在らしむる者である」

という。在らしむる者の中に私たちは入れられているのだから。地球は太陽の外に出られますか。太陽の力の外へ出られないでしょ。私たちは、在らしめている神さまの外に出られるんですか。滑っても転んでも倒れても、神の御手の中にある。倒れたと思ったら、

「ああ、あなたの御手のうちにありました」

と。そのことが本当に分かる為には、聖霊が来なければ分からない。いくら人から聞いても、

「そうですか」までは分かる。

「本当にそうです！」

とは言えない。

「そうでしょう。大体、論理的には分かります」

なんて、論理的にいくら分かってもダメなんだ。

私の神学は「組織神学」なんていう下らないものではない。世界中で

「ジステマテッシェ・テオロギー」（組織神学）

といっている。私のは「ドラマテッシェ・テオロギー」、「劇的神学」という。

「ドラマテッシェ・オルガーニッシェ・テオロギー」（劇的有機体的神学）

という。何と言われてもいい。御霊の世界だから。そういう有難い世界です。

それで、使徒たちは立ち上がった。使徒行伝のペテロはどうですか。私はペテロを読んでいて驚いた。皆さん、本当に聖書を読んでいますか、飯も忘れて。断食なんてわざわざ言わなくたっていい。

「読んでいるうちに食事を忘れました」

と、これが一番本当の断食なんだ。

「よし、今日はひとつ断食してやろう」

なんて、力んだ断食はダメですよ。すべて自然であります。

●愛の神学

そういうことで、使徒たちは本当に立ち上がりました。それは聖霊が来たからです。十字架の贖いがなければ、聖霊は来ない。新約におけるこの霊は旧約時代の霊とは違う。キ

リストの十字架の贖いを通らない霊は本当の聖霊ではない。だから私は、

「十字架と聖霊は絶対に切ってはいかん」

と言っている。そうでなくて、

「霊的になった」

なんて言って、祈りの世界で妙に高揚して、何か力も出るよ。ところが、キリストの十字架の贖いを本当に受けとっていなかったら、へたすると、別な霊に切り替わる。霊的傲慢は最大の罪です。これはマルチン・ルターも言っている。十字架を本当に受けとっている人は傲慢になれない。この姿は平伏しなんだ。

「心の砕けたる者はさいわいなり」

と、「砕けたる魂」なんていうけれども。

「どうも、私はなかなか砕けません」

なんて。少し砕けたような顔も時々する。そんな砕け方はダメですよ。我々は本当は砕けきれない。砕けきれるならば、キリストは十字架に懸かる必要はなかった。キリストの十字架が私たちに本当の「砕け」を、本当の「魂の貧しさ」を下った。これ以上砕けることのない世界を下さった。そこには聖霊がやってくるんです。

聖書は大聖霊派です。ところがまた、これは大十字架派なんです。この二つは分けることができない。

キリストの十字架と甦りの力とその生命をくださったところの御霊の事態が、使徒たちの中に入ってきた。そして、彼らは立ち上がったから、

「我を見よ」

ということになった。

「わがうちに在るものを与える。キリストの名によって歩め」

と言ったら、跛者が立ってしまったではないですか。あれは何も

「ワッショイ、ワッショイ」

と祈祷会をしたわけではない。ペテロの一言がそうしてしまった。この次元は凄い。

あなた方はどうですか、

「私にはできない」

なんてことはない。本当にその世界に入って、自分なんか本当にすっ飛んだ境地でもって、

「主さま！」

と叫ぶ。いいですか、「主さま！」と言う時は、主の方からあなたを呼んでいるんだ。そしたら、その叫びに対して、「主さま」という叫びは、キリストの呼び声を先に受けとって、これに答えるところの叫びなんです。そういう事態である。これは火の玉の如きもの。そして、これは本当にキリストの愛の生命なんです。だから、私の神学は、最後の言葉は「愛の神学」

なんです。もう説明できない。

●先駆者ステパノ

そのようにして立ち上がった使徒たちの最初の先駆者はステパノであります。これが堂々と演説したのが使徒行伝の7章です。大祭司の前で彼は演説してしまった。7章はステパノの大演説です。旧約聖書をキリストの御霊の力でもってグッーと語ってしまった。そして最後に、

51 **項強(うなじこわ)くして心と耳とに割礼(かつれい)なき者よ、汝らは常に聖霊に逆らう。**

と、はっきり言ってしまった。これでもって、聞いている奴らがまた怒ってしまった。その怒った者の一人がパウロです。

54 **人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯(はがみ)しつつステパノに向かう。**
55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、**56 **『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』**57 **ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩(おお)い心を一つにして駆け寄り、**

「耳を掩い」とは「穢しごとだ」というわけです。

58 **ステパノを町より逐いいだし、**

そういう者は町から出すとレビ記に書いてある。

石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59 **かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』**60 **また跪(ひざま)づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就(つ)けり。**

「眠りについた」と書いてあるけれども、天界に行ってしまったわけだ。石に撃たれ、血まみれになりながら、相手のために祈っている。本当の勝利です。聖霊の人でなければ、これはできない。

御霊の事態をキリストが新しく開示した。洗礼のヨハネが、

「私よりか後に来る者は力ある者であって、私は水でバプテスマを施すけれども、この人は聖霊と火でバプテスマをする人である」

と言った。キリストの聖霊のバプテスマを受けないで、水の洗礼ばかりやっているキリスト教会とは一体何ですか。

●パウロへの霊撃

パウロはこのステパノの素晴らしい光景を見ながら、それでもなお顧みない。「あの野郎！」と、むしろ逆にいきり立って、更に迫害を進めていた。そして、大祭司の添書をもらって、ダマスコに向かって行った。９章から、

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（みた）し、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書（そえぶみ）を請（こ）う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽（たちま）ち天より光いでて、彼を環（めぐ）り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。

これは彼の主観的な錯覚でも何でもない。彼は全然反対だったんだから。ステパノを見ても、自分を顧みない。逆になお興奮しているわけだ、

「けしからん、ステパノは気違いだ」

くらいに思っているんでしょう。ところが、甦りのキリストがパウロを見ていた。

「とんでもない野郎だ。けれども、彼の熱心さ、真剣さを、あいつを180度転回してやる」

と。普通の人だったら、これだけのことはできません。これはキリストでなければ、とてもこのパウロには太刀打ちできない。このパウロに桁違いで太刀打ちできるのはキリストだけだ。これはまた、桁が違うですよ、いくらパウロが凄くたって。

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

と。もちろん霊光です。霊の光がきた。真昼に。これは暑い時だったでしょう。真昼の太陽よりも凄いんだ。それでもう目が眩（くら）んでしまって、ぶっ倒れてしまって、三日三晩、ものも見えず、飲食もできず。

私は今日、『パウロのバプテスマ』と書きました。これがパウロのバプテスマです。こんなバプテスマを受けたやつが他にいるかというんだ。パウロが烈しい奴であっただけ、キリストはまたもの凄いバプテスマの施し方をなさった。電撃、霊撃した。光撃、雷撃。雷の如く、稲妻の如く、霊撃を与えた。

5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう

「あなたは誰ですか」と。分からないんだ、まだ。

『われは汝が迫害するイエスなり。』

「なぜ私の弟子を」とはキリストは仰らない。

「なぜ私を迫害するか」

と仰った。キリストをけしからんとパウロは思っているんだから。

●聖書は大ドラマ

キリストの復活体というものは想像を絶するものです。キリストは霊界に今もなおもちろん生きて居られる。私たちに御霊をもって誰にでも百％に臨んでくださる。霊界の不思議な構造は普通の論理では分からない。

キリストは湖の上を渡ってこられた。これはもう本当です。文句なしに本当の事です。

「あそこは少し浅かったので、渡ってきたように見えたのだろう」なんて、下らないことを言う奴がいる。もうとにかく、次元が違う。五千人にパンを与えたのもみんなあれはそのままの事です。

私はおかしな人ですよ、ちっとも霊的な人間ではないけれども、そういうことがパッと無条件に受けとれる。よっぽど馬鹿だとみえるね。あなた方も少し利口すぎるようだ。私みたいに馬鹿にならなければ、馬鹿正直に。信仰の世界は、馬鹿正直にならないと入れない。すぐ

「そんなことがあるだろうか？」

なんて言って疑う。

それよりも、驚嘆驚倒して、ぶっ倒れた方が本当なんだ。そうすると、このドラマの中に入る。聖書は大ドラマですから。シェークスピアがいくら大ドラマチストであっても、聖書のドラマにはかなわない。聖書のドラマは表現以上のドラマなんだ。福音書なんていうものは、本当にその現実から書かれているから、どんな文学者も、これが持っている力にはかなわない。文章がどんなに簡単でも、本当に生きているから、力を持っているから。表現のうまさなんてなことではない。本当の文学は文学を嘲る（あざけ）。聖書文学は最高の文学です。

福音の世界が人間的なものを突破できなかったら、福音ではないですよ。受けざるを得ない。受けなければ、どうにもならない。万人は救いを要する。「誰れ彼れが」ではない。誰でもが救いを要する。これだけ桁違いな世界に一人で入れるかというんだ。キリストが、この御霊をもって、

「人新たに生まれずば……」

と言われたのは、そのことなんです。ちっとも形容詞ではない。

パウロはそのようにして、ダマスコ途上でもの凄いバプテスマを受けました。パウロはこれには参った。

「今まで自分はいいと思っていたのが、本当にとんでもない〔間違った〕事だった」ということが後で分かった。まだ、この時は分からないけれども。

6 **起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』**

「汝なすべき」の「べき」、ギリシヤ語の「デイ」という言い方は、「お前がどうしてもしなければならない」という強い言い方です。

「どうしてもしなければならない事を告げられる」

という。

7 **同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。**

みんな、茫然としてしまって、どうにもならない。

8 **サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダ**

マスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食せざりき。
10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。

今度は、ちゃんと片一方には、アナニヤに示されている。キリストはちゃんと見ているんだ、どっちも。

12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按くを見たり』

不思議なことだね。

13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、

「どんなにそいつが間違っていてもいい。私はあいつを捕まえてしまうんだ」と。

この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』

「多くの苦難を受けざるを得ないかを示さん」

と。素晴らしいことです。

「選びの器」

ときたですよ。

●神に於ける熱心

神に対して、律法に対する熱心は、対する熱心はダメなんです。キリストというひとは神に於ける熱心なひとだった。キリストは律法に於ける熱心なひとだった。その熱心さが違う、向きが。キリストは神さまの律法に於いて熱心であったから、律法を満たした。ということは、いわゆる律法の儀文ではない。モーセの十誡以上のところをしっかりと掴んでいる。これは「山上の垂訓」の言葉を読んでごらんなさい。

「人を憎んだ者は殺したのだ」

と。「殺すなかれ」どころの騒ぎではない。

「憎んだら、もう殺したのと同じだよ」

という。キリストは本当にその中にきて、捕まえてしまっている。神さまの中に本当に入っているから、神の霊法の中に入っているから、霊法自由自在というひとになっている。

律法は自然に、律法以上の律法をもそこに現出して、自ら体現している。自ら満たしている。もちろん、モーセ以上です。モーセの律法以上です。モーセの律法というのは、

「何々すべからず」

という禁止が多い。キリストの方は

「せよ」

という。そして、私たちには

「できるぞ」

と来るんです。実力の裏付けをもってキリストは来る。キリストが

「せよ。すべからず」

と仰っても、

「できるぞ。そんな事はしないね」

ということです。逆にひびく。御霊がくれば、もっと奥から響いてくる。だから、御霊の人は律法から完全に解放されている。相対的な人間としての律法の判断はあっていいよ。けれども、そのもうひとつ奥の世界から、その世界を乗り越えている。

パウロの手紙を見ていると、彼も非常に常識的な人でした。けれども、その常識的なものの言い方は、本当の世界から語っているので、また新しくいわゆる律法を言っているのでは絶対にない。

キリストは、

「パウロをひっくり返して、これを選びの器として、我に於ける熱心に変えてやる。私に対して逆らう熱心を、私に於いて、私の味方となる熱心に変えてやる」

というわけです。凄いね、それだけの実力があるのだから。それは御霊です。

私はこの御霊というのは有難くてしょうがない。聖霊というものは何ものとも代えることができない。どうしてこういうことになったかと自分でも思う。

●見事な転回

17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途(みち)にて現れ給いしイエス、われを遣(つかわ)し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』

と、最後に書いてある。そして、按手してやった。アナニヤは聖霊の人だ。

18直ちに彼の目より鱗(うろこ)のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

**サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、20直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣(の)べたり。21聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害いし人ならずや、又ここに来(きた)りしも之を縛りて将(そこな)

祭司長らの許に曳きゆかんが為ならずや』[22]**サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。**

見事な転回ですね。聖霊が来ると、これはもう文句なしです。パウロは、十字架を瞑想して、入ったのではない。逆らっていた、この活きたキリストにひっくり返された。そして、聖霊を与えられて、今度は、彼が祈って瞑想しているうちに、キリストの十字架が何であるかが分かった。だから、彼はもの凄く十字架のことを言いだした。そこがパウロの本当に健全な受け方なんです。

「自分は己を義としていた、とんでもない霊的傲慢であった。それを塵芥の如く思う」

と彼は言った。事実、活きたキリストにでっくわして、そして、ぶっ倒されて、これはもう文句ないですよ。理屈の世界ではないんだ。もう、議論の余地がなくなってしまった。

「参った！」

と、本当にキリストに参ってしまった。こんなにいきり立って、キリストを敵だと思い、キリストを信ずる者を迫害していたのに、このキリストが光をもって声をもって現れて、

「何故、私を迫害するか！」

と、やっつけられたから。そして、アナニヤの按手によって御霊が来てしまったら、「鱗の如きものが落ちた」という。参ったです、これは本当に。もう、超論理の世界です。

人間は頭で生きているのではない。人間は魂で生きている。その魂を撃たれたら、魂が生きていると思ったのがとんでもない生き方だということに気が付き、ひっくり返された時に、

「目より鱗の如きもの落ちたり」

というのは、魂が本当に切替えられた。キリストのものにされてしまった。キリストの生命でもって浸透させられてしまった。

●あなたこそは

神に対する熱心、律法に対する熱心とは何ですか。自我ではないですか。自我が立っている。

「我こそは律法に対して、我こそは神に対して熱心である」

という、その

「我こそは」

がいけない。パウロ自身の存在が完全に神さまから賜っている存在ではないですか。我々は大自然から、お父さんお母さんから、いろいろな意味において、すべて賜った存在です。自分でもって出てきたのではない。この賜りたる存在の、その元は神さまなんだ。だから、

「胎より出る前から、神さまは自分をちゃんと知っていた。顧みていた」

なんてことを後の方で言っている。

「我こそは」ではなかった。

「あなたこそは」

であった。我が汝に切り替わった。パウロはそれまでは、「我こそは」なんだ。今度は、「汝こそは」になった。我なんかすっ飛んでしまった。

「どうぞ、あなたの仰るとおりに。私はあなたの僕（しもべ）となります。我はキリストの僕なり」

と言って、パウロはそれから本当に自分を僕として自覚した。自分を本当に投げ出した。

「自分を投げだす」

というと、

「自分の意志のないやつは意気地がない」

なんて思うかもしれない。そんなことではない、この投げ出しというのは。汝という神・キリストは絶対者ですから、「汝こそは」と言って、その中に投げ出すと、この汝がこっちの中に入ってくる。

「汝わがうちに、我れ汝のうちに」

とパウロが何回言っているんですか。

「我れキリストの中（うち）に、キリストわがうちに」

という。御霊がくると、この世界なんです。「うちに」と、形容詞で言っているのではない。これはもう御霊が共通している。ありがたいね。

●イザヤ書53章の贖い

人間はみんな破れの器ですよ。

「破れていない」

なんて思ったら、とんでもない間違い。破れというのは「パラダイス・ロスト」「楽園喪失」という意味です。神さまの天国から落っこちている人間なんだ。このまま放っておくと地獄へ入ってしまう。破れだから、本当に砕けてしまわなければ。その砕けができないから、キリストが砕けてくださった。

「参りました！」

というのが砕けなんだから。本当に降参しないんだ、みんな、降参したような顔しているけれども。「本当に降参しました！」と言って祈ってごらんなさいよ。聖霊が来るから。

「本当に降参しました！」

「よし、その本ものを本当の本ものにしてやる」

というのが十字架なんだ。「人間の心の本当」も悪くはないよ。それも結構でしょう、それも本当でしょう、嘘ではないでしょう。けれども、その本当ではダメなんだ。その真実で

はダメなんだ。パウロも大いに真実であり、義であった。ダメなんだ、それは。神さまとの交通が、キリストとの交通が絶えている所で、いくらキリストに向かって、神さまに向かって真実であったって、それは自我がやっていることで、自我が立っている。

「それはダメだ、お前は。汝こそはと言って、私の中にきて、私の中からくる本ものが入ってきたら、今度は本当のぶっつぶれの世界だ。これは十字架がぶっつぶしてくださったんだから」

と。ここへ入ってくる。まだ、この時には十字架は分かっていないんだけれども。とにかく、これにぶつかったものだから、パウロは、

「目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と。

「このキリストだ」

というわけです。そのうちに、

「何故、キリストは十字架に懸かったのだろうか？」

と、瞑想して祈っているうちに、この十字架が――旧約聖書はパウロは知っているから、イザヤ書53章の贖い――

「我らの罪のために砕かれてその罪を負った」

という、あの不思議なイザヤ書53章が本当に彼に響いてきたのでしょう。

キリストはイザヤ書53章を身をもって受けとっていたから、あのエマオ途上の旅人にそのことを語った。あの二人の旅人は

「あれはとうとう十字架に架けられてしまった」

くらいのことを言っていた。ところが、第三の旅人キリストは

「何のことをしゃべっているのか？」

と言って、そして、イザヤ書のところに来たら、彼らはこれに撃たれて、燃えるが如きことになってしまった。

パウロが本当にこのようにして直々にキリストにぶつかった。私たちは、

「それはあの時は仕方がない。本当にキリストがいたんだから。今はしょうがない」

なんて、そうじゃない。二千年後の今日といえども、キリストは誰にも直々（じか）に現れたもう。御霊の世界で、祈りの世界で。

●それが本ものであるか

私の兄貴は死ぬ少し前に、白衣のキリストが現れて、

「お母さん、イエスさまが迎えにいらっしゃったのでお先に失礼します」

と言った。彼はキリストを見ているんです。

見るにしろ、聞くにしろ、手で引っ張られるにしろ、体験の仕方は何だっていい。とにかく、

私たちは具体的に一人一人が直々にこの事態にぶつかるまでは、どうにもならん。その人が御霊にどういう現象でぶつかるかは、それは一人一人ですから、

「こういうことであります」

なんて、ひとつも説明は要らん。

とにかく、ダマスコ途上に於けるところのパウロのバプテスマがどんなに素晴らしい事態であったか。これほどのバプテスマを受けた人はない。これほど反対していた奴が、逆に本当にもの凄いバプテスマを受けられた。そうすると、

「私はあまり反対していないから、いい加減なところでよかろう」

なんて、そうではない。あまり反対していなくても――信仰の世界は、現象的に「あまり」とか何とかいうことではない――それはどうでありましても、本当に受けとるときは、現象的にはどういうような烈しさであろうと、烈しさがなかろうと、

「それが本ものであるか」

ということだけが大事なんです。これは主観的な本ものではないですから。体験すれば、分かる。

このパウロの転換。そして、宗教改革者マルチン・ルターが独房でぶっ倒れた。やがて、本当に十字架を受けとった。そしたら、彼の魂が本当に救いにあずかった。それから宗教改革が自然に起きてきた。彼は宗教改革をしようと思ったのでも何でもない。どこまでも、彼は忠実なカトリック教徒であったんだけれども、ローマがけしからん事をするから、聖書に反する事をするから、はっきりものを言った。はっきりものを言ったら、それが宗教改革になっただけの話です。

今は、日本の学者もダメなんだ。いわゆる自分が主観的に信じたことでなくて、受けとった真理のために捨身で叫ぶような学者がいなくなってきた。昔はそういう気骨のある学者がいたようだけれども、今はダメだね。

キリストの福音のためには、パウロはもう止むにやまれない。

「これを宣(の)べ伝えなければ、我は禍害(わざわい)なるかな。止むを得ざるなり」

と言っている。

「神の言に酔えるがごとくなってしまって、火が骨の中に燃えつくようだから、黙(もだ)そうとしても黙すわけにいかない」

と、エレミヤもそう言った。

みんなそれぞれでいい。あなた方一人一人は一人一人でいい。ただ問題は、

「本当にキリストを生命としているか」

ということです。

「我にとりて、生くるはキリスト」

という言葉が後で出てくる。「我にとりて」といったって、ギリシア語では「エモイ」と、

ただ三格で言っているだけです。

「我には生くるはキリスト」

「我にはキリストは生命」

と言ってもいい。

「自分が生きているのか、キリストが生きているのか。いや、実にキリストが生きていらっしゃるから、この生命をいかんせん。水素爆弾が爆発するなら爆発してみろ、私は死なないぞ」

と、それだけの烈々たるキリストの御霊の生命が我々の中に燃えていなければ、

「キリスト者に非ず」

とパウロに言われる。

迫害していた熱心さが逆にキリストに在っての烈々たる事態に変わった。

「私たちは、自分の側は問題でない」

というのは、その意味なんです。それでノホホンとしているのではない。本当にキリストの中に入っていれば、ノホホンとしていられなくなってくる。

もうここまで私たちは学んでくると、皆さんは、何かしらんが、内側が熱くなって、もう祈らざるを得ない状態になっていらっしゃると思う。あとは、パウロとパウロのバプテスマを瞑想しながら、この中に入っていくこと。実は気が付けばいいんです、すべて。

「キリストは十字架をもって、私をぶっ飛ばしていらっしゃる。相対的な私はどうであろうと、そんなことは問題ではない。ははぁ、そうでしたか。あなたをまだ仰いでいると思っていたのが、ちょうど私が空気の中にいるように、あなたの懐の中にいました」

と。本当ですよ。何をか言わん。何も祈らなくても、私がこうやっているうちに、あなた方はその世界に入ってしまって、

「もうこれで祈祷会はおわり」

なんてなことになる。一瞬の祈祷会。それだけの魂の柔軟さをもっていますか。

「ワッショイ、ワッショイ」

と祈らなければならないということは一つもない。ある時は嵐のように祈ったっていい。ある時は沈黙で。自由自在です。大自然の如くなってください。私は大自然を瞑想していると、福音と同じことになってしまう。だから、ドラマチックなんです、組織ではない。生命なんだ、有機体的だから。一切の矛盾も何も全部包摂してしまう。

人に何と言われようと、しょうがないね、この自信ならざる自信というのは。これは天震だから。地震くらいのことではない。天が震うのだから恐ろしいよ。地震くらいでは大したことはない。どうも、宇宙的になってくる。キリストが宇宙的な方ですから。地球上がどんなにひっくり返ったって、原子爆弾の何千倍だって大したことはないよ。地球なん

てものは太陽系の小さな粒で、銀河系の中にいったら、顕微鏡的な存在なんだ。その上でもって大騒ぎをしている。天文学をやるといい。そして、大きな気持になってくださいよ。何でもやってくださいよ、ひとつ。時々、天文の本を読むと、大きいから楽しいね、桁違いの数字だから。

「聖書の奥にキリストの言が響き、聖書は注解なんていう、まだるっこい事をしている世界ではなかった、これはドラマであった、この中に入りましょう」

ということに気が付く。聖書というドラマの中に入ったら、もの凄い人になってくる。それを向こう側に置いて研究なんかしたらダメですよ。

「ギリシア語、ヘブライ語だ」

なんて言って、御苦労さんな話だ。ギリシア語やヘブライ語をやったっていいよ、若い人は。

「するな」

なんて言っているのではない。けれども、

「それをしたら、聖書がそれだけ分かる」

なんていうような解釈の仕方をされると、鼻持ならない。私は少し乱暴なことを言う人ですね。けれども、本当にそうなんだ。

●パウロのバプテスマ

パウロの回心は、パウロ個人の生涯の転換期であり、焦点である。人間の精神史の中での大事な一つの点です――キリストの十字架は桁違いなものだけれども――そういう驚くべき事態がこのパウロの回心、パウロのバプテスマなんです。だから、クリスチャンがとにかく、大なり小なり質的に、同質的なバプテスマを受けるのでなければ、この聖書の現実には入れない。これは関門であります。だから、パウロがはっきり言っている。

「御霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」（ロマ８・９）

と。これは文句なしにそうです。キリスト者の手前のキリスト者はたくさんいるよ。偽りとは言わないけれども、手前なんだ。手前勝手だから。その手前勝手を止めてしまわなければ。向こう側に入らなくては。

「キリストの信」

でも、

「神さまの妬みの愛」

でも何でもいい。その向こう側の中に自分を投げ入れていくんです。

「投げ入れ」

でも、

「ぶっ倒れ」」

でも、本当の意味での

「気が付き」

でも、何でもいい。表現はとにかく、事態が本ものになればいい。勢いのいいやつは大いに投げ入れてください。

「私はどうも勢いが悪いから、ぶっ倒れよう」

と、ぶっ倒れてもいい。

「私はダメだから、気が付こう」

と、気が付いたっていい。どの方法でもいい、どの道でも。私が言わない道もまだあるでしょう。どれでもいいけれども、とにかく、キリストの中に入らなければ。入らなければというのは、十字架がちゃんと門を開いています。

「みんな引き受けたよ。心配いらんよ」

と。「心配いらんよ」という聖言を全的に受けとってごらん。「全的に受けとる」ことが、投げ入れであろうと、ぶっ倒れであろうと、気が付きであろうと、いいよ。但し、それが本ものでなければダメです。頭ではダメだ。全存在的でなければダメなんです。キリストにただ小指だけ渡したってダメだ。全身をです。

そして――私だって今までにバプテスマを経験しています。皆さんもいろいろ経験しているでしょう。けれども――今日は今日で一回限りの、一つの事態に自分を入れていく。魂の世界の真理というものは、

「2＋2＝4。はい、分かった」

というような真理ではない。常に新たに受けとっていく世界です。常に新たに受けとっていくと、いよいよ満たされていく。満たされているから、いよいよ求めていく。これがドラマチックな構造なんです。

●祈り

祈ります。主さま。キリストさま。この鹿沢の山里にこのように、南は鹿児島から、また東西南北から、また信州の親しき友人たちも、原始福音の方々も、みんなこのようにして集められて、あなたの民とせられ、パウロの驚くべき回心の事態、バプテスマの事態、パウロの生涯の大事な焦点に向かって、ここまでお導きくださり、感謝いたします。

世界の歴史は、キリストがパウロをひっくり返したことによって、新しい紀元が我々の相対的な歴史の中に画されて来ました。神さま、感謝いたします。私たちは、このパウロのひっくり返りと同じく、私たちも一人一人が本当にあなたにひっくり返されていることに気が付き、本当にあなたに救われていることに気が付き、ああそうでしたかと、本当に私たちはこのままあなたに救われているこの事態を感謝いたします。

まことに主イエス・キリストの御霊が私たちの中に入って、かく私たちの中に、

「我れキリストの中に、キリストわがうちに在りたもう」

との事態を、十字架の贖いを感謝いたします。あなたに贖われたから、私たちの中にはもう心配はありません。あなたの御霊が私たちの中に入って、私たちの中に生きていたもう。あなたの御名は讃むべきかな。

我にあらず、汝なり。ただ汝のみ。「南無キリスト」と申し上げます。実に、南無キリスト。イエス・キリストさま、あなたが私たちの一切であることに――あなたは私たちを求め、私たちに掴みかかり、私たちにご自身を与えてくださいます――感謝いたします。

どうか、ここにある兄弟姉妹達の中に、本当にあなたが、その人の主となり、その光となり、愛となり、生命となってください。いかなる環境も現実も、何も心配いたしません。一切はあなたと一つになることによって、解決していきます。

ここに一切が解決されてあります。甦りのキリストを仰いでください。罪に打ち勝ち、死に勝ち、病に勝ち、陰府に勝ち、サタンに勝ったキリストを。迫害するパウロに、

「なんぞ我を迫害するか！」

と、パウロをひっくり返したもうたキリストを。パウロを本当に救うために、驚くべき愛の仕業です。パウロはこのキリストの愛に、力強い驚くべき愛に圧倒されました。

私たちも主さまと一対一に立ち向かい、平伏します。あなたでしたかと、気が付きます。

「我汝のうちに、汝わがうちに」

との、絶対恩寵のご本願の中に入ります。ボロ器のまま、「我を見よ」と言うことができます。何となれば、わがうちなるキリストなるが故であります。悩める人、苦しめる人に、

「我を見よ」

と、どこへ行っても私たちを通して本当の按手をなさしめてください。あなたの愛が、力あるあなたの愛が、御霊の愛が、一切を救い上げていきます。

パウロはかくして立ち上がりました。パウロは世界伝道に向かいました。キリストが中にあって共に歩きたもうたが故に、いかなる艱難にも決して屈しませんでした。運命環境いかにもあれ、パウロは勝って勝っていきました。驚くべきことです。

主さま、あなたが為したもうたこの驚くべき力。パウロはただあなたの御名を讃え奉りました。私たちもこれからの生涯を一人一人がパウロとなり、ヨハネとなり、ペテロとなり、使徒的信仰を身をもって証したく存じております。

主イエスさま、あなたは一切でありたもう。

「南無キリスト」

と申し上げます。南無キリスト即の世界です。南無とはキリストに帰命すること、帰り入ることです。キリストに帰り入ることが本当の前進です。ありがとうございました。御名を讃え奉ります。御名により、アーメン。